

蔽おしかな雰囲気。十字架をかけた神聖なる礼拝堂には、そんな雰囲気が似合う。しかしここが蔽か……つまり威儀いぎ威蔽いげんがあり近寄りがたいといった雰囲気を醸かもし出しているのは、なにもここが礼拝堂だからという理由だけではない。

「我々は正しい知識グノーシスを得る事によって救われます」

十数人の信者を前に、そして二匹の蛇で形成された十字架……円の中に十の字が書かれた蛇のグノーシス十字を背に、一人の男が教えを説く「説教」を行っている。

ゆつたりとした司祭服を身に纏まとい、半球型スカルクヤツブの帽子を被ったこの男。状況から、この礼拝堂に集う者達の中では最高位の人物のようだ。そして彼らが異端教団カルトだということを考慮すると、最高位とはつまり「教祖」ということになるだろう。なるほど、確かに男からは教祖らしい威蔽いげんが漂っている。場の「蔽かな雰囲気」は彼から発せられているようだ。

「この宇宙コスモスを作った創造主は、無知で愚かなデミウルゴス。故に作られた宇宙コスモスは無知であり、それは秩序も法則も無いことを意味します。言い換えるならば、宇宙コスモスは邪悪に満ちているということになるでしょう」

旧約聖書を紐解けば、宇宙世界は唯一神ヤハウエによって創世された物と書かれている。グノーシスという一派が、何故キリスト教の異端とされるか。それは教祖の語るこの一文だけでありありと見えてくる。

「その宇宙コスモスの中で生きる我々人間もまた、宇宙コスモスの一部。創造主デミウルゴスによって作られた、無知で邪悪な存在なのです」

つまり、人間は神の子であるとする性善説が従来のキリスト教の教えならば、人間は邪神の子であるとする性悪説を唱えているのがこの異端教団カルトの教え。異端どころか、邪教として弾圧されるのも頷ける。

「しかし我々人間には永遠にして神聖なる「霊フネウマ」が与えられています。いえ、我々人間の神髄こそ霊フネウマそのものだと言えるでしょう」仰々しく教祖は両手を広げ、信者達に向け声高に教えを唱え続けている。「霊フネウマは物理的な「肉体サルクス」と精神的な「魂フシユケイ」という、創造主デミウルゴスによって創られた牢獄に捕らわれています。我々の霊フネウマが救われる方法は、真の神を理解するための知識グノーシスを得ること。さすれば、霊フネウマは肉体サルクスと魂フシユケイから解放され、救済されるでしょう」

ここまででは、これまで数多く産まれては潰された一般的な……異端教団カルトに一般という言葉を当てはめるのもおかしな話だが……グノーシス主義の主な教え。ここまでなら、考え方の違いから異端扱いされるまでは理解できるが、知識グノーシスを追い求める事に全てを捧げているはずの彼ら信者が手に手に槍や剣などの武器を携えていることが理解できない。そして先日、狼男ウエア・ウルフを襲った少女がその中にいることも。

そう、彼らはグノーシス主義という異端教団カルトの中でも、更に異端的な宗派なのだ。

「しかし、単純グノーシスに知識だけを追い求めれば救済が成されるといふ状況では無くなりつつあります。何故ならば、ここ日本では今ゆゆしき事態に陥っているからです」

武闘集団を結成する理由。それが教祖の口より語られる。信者にしてみれば何度も耳にしている内容であろうが、しかし復唱されることでその使命を何度も胸に刻むのだろう。皆真剣な面持ちで教祖の言葉に耳を傾けている。

「日本には古来より、土着の「妖怪」という悪しき者どもが住み着いておりました。それだけでも嘆かわしいことですが、近年妖怪達だけでなく、洋の東西を問わず様々な地域が

ら魔物や悪魔が日本に集まり始めています」

例えば、**狼男** ウエフ・ウルフ は、「元来日本にはいなかった外来種。主にヨーロッパを住処とした魔物だった。そんな **狼男** ウエフ・ウルフ が日本にいるのは、単なる観光と言うにはあまりに不自然だろう。」

「このような事態になった原因は諸説ありますが、主な原因は、ここ日本が「宗教の混沌地帯」であるからだと思われれます」

日本は文化的に、仏教が根強く広まっている。しかし日本国民の多くは文化として根付いた仏教をそれなりに知ってはいても信仰はあまりしていない。さらにはクリスマスなどのキリスト文化を取り入れるなど、様々な宗教文化だけを取り入れて今に至っている。文化はあっても特定の神を信仰するような習慣は日本人にあまりない。

そもそも日本は仏教以前に、八百万の神々 やおみひつす を信仰する習慣があった。様々な物に神を見出し、崇める習慣が。そんな日本人は、来る者……いや、来る神を拒むことなく受け入れる姿勢が先祖代々より受け継がれているとも言えた。このような日本の姿勢を、何時からか誰からか、「宗教の混沌地帯」と呼ぶようになっていた。異端教団 カルト の教祖はこの現象のことを指して言っている。

「そもそも、真の神を理解しようともせず異教の神々を招き入れる姿勢も嘆かわしいことです。この混沌状況が、世界各国から魔物や悪魔まで招き入れる結果になっています。しかも今の日本人は墮落の一途をたどっている。彼らにとっても付け入る隙が大きい日本人は格好的となってしまうています。ああ、なんと恐ろしいことでしょうか……」

どのような神をも受け入れる日本は、魔物や悪魔達にとっても住み心地の良い国となっている。加えて、経済大国のぬるま湯につかりきった日本人は様々な誘惑に屈しやすい人種になっている。このような美味しい餌 日本入 を逃す手はないと考えるのは道理だろう。

しかし、狙っているのは悪魔ばかりではない。

「この状況を打破し、日本を、日本人を救うためには、真の神が存在することを広く知らしめ、皆が知識 グノーシス を求める我らの同志になることへ目覚めて貰わなければなりません」

つまりこの異端教団 カルト は、宗派が混沌した日本で自分達の教団を広める布教活動を行おうとしている。付け入る隙の大きい日本人を格好的にしているのは、彼らだって代わりはないのだ。

「その為にもまずは判りやすい形で、彼ら日本国民に我々の正当性を示さなければなりません」口調を強め、先導者は拳を握りながら演説を続ける。「悪しき創造主 デミウルグス より創られし、邪悪な魔物達。霊 フネウマ を持たぬ、悪しき肉体 サルクス と魂 フシユケイ のみで創られた魔物達。奴らをこの日本から追放し、知識 グノーシス を求めるに適した国へと日本を変えていかなければなりません。その為、あなた達の力が必要なのです！」

力説は頂点へと駆け上がり、握られた拳は高々とかがげられている。鼓舞する教祖に煽られたか、これまで静かに説教を聞いていた信者達が、手にした武器を高々と掲げながら一斉に雄叫びを上げる。知識 グノーシス を我らに。いつしか、信者達は唱和を始めていた。

もし、もしここに信者ではない第三者がいたならば、この光景は異様……狂気の光景には見えないだろう。荒ぶる彼らの姿は、まるで血に飢えた狂戦士 バーサーカー ではないか。とてもではないが、「知識 グノーシス」を追い求めている知性的な信仰団体には見受けられない。

程なくして、教祖が大きく広げた手で信者達に静まるよう身振りて伝える。静寂が戻ったところで、教祖はまた演説を再開した。

「ここで皆に報告があります。昨夜、我らが同胞であるシスター月原が^{ウエア・ウルフ}狼男と接触いたしました」

どよめき。信者から様々な声が囁かれている。ついに来たか。獲物が現れたか。次こそは私が。悪しき魔物に鉄槌を。

口々に漏らす彼らの言葉は、僧侶の言葉と聞こえなくもないが、やはりどこか血なまぐさい。

教祖は僧侶達の中から、ただ一人沈黙を守り続けていた一人の少女を手招いた。その少女こそ、教祖の言う^{ウエア・ウルフ}狼男と接触した彼らの同胞。

少女は教祖の横に並ぶと、深々と信者達に向け頭を垂れた。

「シスター月原は七年前、彼女が九つの時に両親を魔物に殺されてしまいました。その場に偶然居合わせた私はどうか彼女の救出には間に合いましたが、残念ながら彼女の敵を討つことは出来ませんでした」

その事が今でも悔やまれる。そう伝えたいのか、教祖は顔を右手で覆いながら軽く左右に振って見せた。

「しかしながら、シスター月原は自身で敵が討ちたいと我らの同胞になることを望み、長い長い修行の年月を経て、ようやく先日戦士として認められたばかりです。そんな彼女が^{ウエア・ウルフ}狼男を発見できたのは偶然でしょうか？ いや、これこそ神のお導きに他ならぬ！」

語尾を強め、少女と^{ウエア・ウルフ}狼男の接触が運命なのだとは彼は印象づけようとしている。

「奇しくも、あのとき私を取り逃がした彼女の敵も^{ウエア・ウルフ}狼男でした。まだ解りませんが、同じ土地に現れた^{ウエア・ウルフ}狼男が七年前の事件と無関係とは思えません！」

自らの言葉で気が高まったか、教祖は教壇を叩き、七年前の怒りと^{ウエア・ウルフ}狼男発見の興奮を隠そうとはしなかった。

「さあ我らが同士よ。シスター月原の敵を討ち、より一歩知識へと近づくためにも、悪しき魔物を、^{ウエア・ウルフ}狼男を、我らの手で葬り去るうではありませんか！」

再び場は熱狂という狂気に包まれていく。武器を掲げ、声高に^{アイオーン}神への感謝と^{ウエア・ウルフ}狼男打倒を叫んでいた。

ただ一人、少女だけが口を閉ざし、じっと同士同胞の狂乱を見つめていた。感情のこもらない、しかしその奥では何か炎が揺らめいているかに見える、その瞳で。

得てして、男というものは「女子校」という響きに弱い。女の花園に幻想を抱いてしまいがちだ。だが現実の女子校は男の幻想をももの見事に粉碎してくれる。そういう物だと、おおがみケン大上賢は自分に何度も言い聞かせていた。

「非常に特殊なケースですが、本日より本校へ二週間、リサーチ研修のため来校される信徒のお二人を紹介します」

貫禄のある、しかし柔和な笑顔が印象的な男性が舞台上でマイクを通し朝礼の挨拶を行っている。彼こそ、ここ聖パトリック女学園の学園長であり、全校生徒がそろったここ体育館で生徒達へ「特殊ケース」の説明を始めているところだ。

「これまでも、「実習生」として本校に來られた先生方はいましたが、今回来校されるお二人は実習生ではありません。有栖学園あしすより、教会の運営などの研修を行うためにいらつしやいました」

日本屈指のマンモス校、有栖学園あしす。幼稚園から大学までの一貫教育を実践している学園であり、教科も農業や商業からIT産業まで幅広い。加えて留学生や在日外国人の受け入れ体制も万全と、まさに日本における教育の集大成と言っても過言ではない、そんな学園だ。

その有栖学園が、より国際性を重視する意味も含め敷地内に教会を建てることとなった。その為、教会を学園という場の中でのいかにして運営、活用していくのが望ましいのか。その研修のために、ミッションスクールである聖パトリック女学園へ有栖学園あしすより二人が派遣される事となった。

これが学園長より生徒に伝えられた、表向きの理由。

当然ながら、派遣された信徒……の肩書きを偽っている大上には本来の目的が別にある。

そもそも大上は カトリック教徒 神父 ても プロテスタント教徒 牧師 でもない。

学園寮に入っていた、異端教団の若き女戦士。彼女の身辺調査、および異端教団カルトと学園の繋がりを洗いざらい調べ上げる。それが妖精学者フェアリードクターの手引きによって潜入に成功した大上の目的である。

しかし学園長が生徒に語った内容の全てが偽りというわけではない。その証となる一人の、修道女シスター服に身を包んだ女性が、学園長に招かれ舞台上の教壇へと歩み寄った。

「初めまして、聖パトリック女学園の皆さん。有栖学園あしすより参りました、四方雅子よもと申します。あちらの学園では「チャコ」と呼ばれていますので、こちらでもそう呼んでもらえると嬉しいです。二週間と短い間ですが、よろしくお願ひします」

有栖学園あしすが教会を建てることも、その為の研修に來ているのも、嘘ではない。ただそれは、今挨拶をした修道女シスターのみに当てはまること。もう一人の、信徒と人間ヒトの皮をかぶった神父には該当しない。その男が深々と頭を下げた修道女シスターと教壇の前を入れ替わり、軽く頭を下げた後にマイクに向かい挨拶を述べる。

「聖パトリック女学園の皆さん、初めまして。本日より二週間、皆さんと共にここ聖パトリック女学園で過ごすことになりました、大上賢です。よろしく」

これまで静寂を保っていた女生徒達から、僅かながらざわめきが起こる。目の前に狼男である大上が現れたためか？ いや、そうではない。

大上は今、人の姿をしていた。身体を覆っているはずの体毛もなく、愛用のトレンチコートも羽織ってはいない。代わりに黒い神父の服を身につけ、ずいぶん小さくなり牙も

見あたらない口を軽く開き笑顔を振りまいている。そしてその笑顔こそが、ざわめきの要因になっている。

格好良くない？ 超イケてるんだけど。あちこちで囁かれる声も、集まればざわめきになる。

そう。大上が変身した人の姿は、女性から見て非常に素敵な男性に見えている。背は高く、体格も引き締まっており、そのくせ凛々しい顔立ちには俳優やホストを思わせる。一言で簡単に言い表すなら、「美形スポーツマン」といった容姿。もしここが厳格なカトリック系の女子校ではなく、ごく一般的な学校であったなら、騒ぎはもっと大きくなっていただろうか。

だが、騙されるな。ざわめきという歓声の中で、大上は心の中でまた自分に言い聞かせる。

女子校は男が考えるような楽園ではない。気を抜けば、どこで足をすくわれるか解らない。勘違いするな、ここはカトリック系の女子校という、マリア様が見ているような環境下にある学園なんだ。あこがれの先輩と親密になることは望んでも、部外の神父に興味なんかあるものか。本当はあると思うけど、あると思っただけで問題になるんだ。そうでなくとも今の俺はつたとしても、こちらが手を出せばそれだけで問題になるんだ。そうでなくとも今の俺は神父ということになっているんだぞ。だからこそハードボイルド、ハードボイルドに決めなければ……大上は何度も何度も、まるで呪文かのごとく心に念じていた。その言い聞かせが幸を引き寄せるのか不幸を招くのか。人にはそれなりにポリシーという物があるのだから、そのポリシーが、時として思わぬ結果を生じることになるのを、この時の彼はまだ知らないでいた。

まあその前に……本来心配しなければならぬのは女生徒との禁断の恋ではなく、正体がバレること無く任務を終えられるかどうかの方だと思うのだが……今大上の脳内では、完全にその事は抜け落ちているようだ。それだけたくさんの女生徒を前に舞い上がっているのだろうか……全くそれを表に出さないのは、彼が常日頃自稱しているハードボイルドを貫いているおかげと言えるのだろうか？

「んん、静粛に」咳払いに注意の一言を添えてから、再び学園長がマイクの前に立ち話し始める。「今説明があった通り、お二人は教会の視察と研修が目的で来られています。つまり、普段のあなた方も視察の対象となるわけです。聖パトリック女学園の名に恥じぬよう、適切な対応を心がけてください」

ざわめきも止み、朝礼は滞りなく進行していく。壇上では学園全体の注意事項や近づきつつある期末考査、それに伴う部活動の休止時期などが話されている。それらの事と直接の関係を持たない大上は、一人まだ心の中で呪文を唱え続けていた。

「さすが大人気でしたね、大上神父」

何重にも心にかけてた防御呪文が、たった一言でアッサリと崩壊する。

大人気？ やはりそうなのだろうか？ 勘違いではないんだな？ 大上の心が、だらしなく緩んでいくのを本人も自覚していた。

「いやあ、この学園に男がいることが珍しいだけでしょう」

言いながら後頭部を軽く搔く。笑ってごまかすことで、気のゆるみを悟られぬようにしたかった大上。だがその仕草と僅かに高揚した頬を見れば、彼がまんざらでもない様子なのは声をかけた四方よもにもすぐに判る。

「でもだからって、生徒に手を出しちゃ駄目ですよ？」

自分で言い聞かせるよりも強力な防御呪文……いや、もしかしたら攻撃呪文か。彼女の一言は緩んだ大上の心を一気にまた引き締めた。むろん半ば冗談で言った一言であるのは双方共に判ってはいるが、それでも男というのは、女性からの一語一句に過敏な反応を示すものなのだ。

「判つてますよ。今回は有栖学園あしすの名前と立場を使わせてもらってますからね。チャコさ……シスター四方にもこれ以上迷惑はかけられませんから」

まだ言い慣れない独特な名称を言い直し、大上は真面目に答えた。冗談であっても本当に気を引き締めて取りかからなければならぬ事だから。

二人は今、教会の中にある職員室にいた。この学園ではクラス担任などが使用している職員室の他に、教科ごとに小さな職員室がいくつも存在している。二人がいるのはそんな小さな職員室の一つ。他の先生は全て授業などのために出払っており、室内は二人きりだ。このような状況なら、四方を普段言い慣れている「チャコさん」と呼んでもかまわないのだろうが、仮初めでも二週間神父という立場を演じるのだ。下手なところでボ口を出さないようにするために、今のうちに慣れるべきだろう。

「いえいえ、私などがお役に立てるのなら。でもさすがに、初めて理事長から大上神父のことを伺ったときには驚きましたけどね」

有栖学園あしすが教会を敷地内に建てる事。そしてその教会に四方が籍を置くことは決まっていた。しかし聖パトリック女学園の視察や研修までは予定になかった。そんな折、大上の助力者である妖精学者フェアリドクターの天道寺が聖パトリック女学園への潜入について有栖学園あしすの理事長に相談を持ちかけたところ、理事長から教会の建設を口実にし研修という名目で潜入させるのはどうだろうかと提案されたらしい。

「ホント助かりました。にしても……よくもまあ、こんな強引な方法が通りましたね」
助けてもらってなんですが、と大上は付け足し、ここまであまりにも上手く事が運んだ経緯に疑問を感じ、それを口にした。

「理事長は手腕家てんぽんかですからね」軽く苦笑しながら、四方はそれでも、と言葉を続ける。「こちらの女学園は、私が在籍している女子修道院とも繋がりがあるんですよ。その事も、今回の強引な研修が通用した要因となるでしょうね」

四方の話では、女学園の名前にも使われている「聖パトリック」という聖人と、彼女が在籍している女子修道院とは浅からぬ関係があるらしい。その繋がりがからか元々修道院から学園へ時折修道女シスターが派遣されイベント事などを手伝ったりもしているらしい。故に今回の件も唐突ではあったが気軽に頼める間柄なのとか。偶然が重なっているとはいえ、それなりに筋は通っていた。

そうだとしても、このような強攻策を押し進められる有栖学園あしすの理事長という人物はどれほどの人物なのか。大上はカウンターハンターという仕事をする上で天道寺を通して何度も理事長の恩恵を受けていたが、その度に理事長のことが気になっていた。天道寺は「強大なスポンサー」なのだだけ語り、多くを語ろうとしない。恩恵は受けても一度も面会

がない大上は理事長という人物がどのような人なのか気にはなるのだが、ハードボイルドの主人公に謎めいた財団のバックアップというのもお似合いだろう。むしろ「機能満載な上にしゃべる車」などが贈られたって不思議じゃないのがハードボイルドさと、大上はどこかハードボイルドを間違って認識した上で結局深くは考えないことにしている。

「それでも準備に三週間も掛かつちやいましたけどね」

「いや、充分早いですよ。普通ならもつと掛かるでしょうし」

そう、大上が異端教団カルトの少女と出会ってから三週間という時間ときが流れていた。

大上は天道寺へ潜入について打診した後も、独自に学園とその周辺を調査していた。結果としてたいした情報は得られなかったが、天道寺を通して一人のスパイを雇うことに成功している。そのスパイは既に学園の潜入を果たしており、この後直接会う手はずになっていた。

「理事長から伺いましたが……大上さんも大変なお仕事のようにですね。あまりご助力できませんけど、がんばってくださいね」

さすがは修道女シスター。その笑顔と励ましで、大上は引き締めた心に安らぎを感じていた。

「それにしても……神学科ですか。ずいぶん本格的なミッションスクールなんですね、ここ」

大上は室内に小さく貼り付けられたプレートを見ながらつぶやくように話題を変えた。

二人がいるのは学園内に建てられた教会の中にある神学科の職員室。ここは教師と言うよりは四方と同じ修道女シスターと呼ぶに相応しい先生達が使用している。そして神学科とは文字通り、宗教の教義や信仰について研究する学問のことで、ここでは当然キリスト教の事を学ぶ授業を指す。

「いえ、そうでもないみたいですけどね……」

四方が言うには、そもそも神学科の授業は各クラス週に一度程度しか行われておらず、試験などもないらしい。ミッションスクールという形を守るために行われているような物で、生徒もほとんどが無信仰の者達ばかりなのだとか。

生徒の親たちがここに娘を入学させる目的は、女子寮が充実していることと、躰などの教育がしっかりしている事が理由としてあげられるらしい。また俗に言う「お嬢様学校」よりは敷居が低いため、IT企業などで財をなしたような、「プチセレブ」達がこぞって通わせたがっているとも、四方は付け足した。

しかしそこまで宗教色が薄いのなら、あの少女がここの生徒である必然性も薄れるのではないか？ 大上は思考し始めた……が、四方の話に耳を傾けている大上は一旦その疑問を頭の片隅に追いやった。

「教会も、礼拝に使うのはクリスマスなどの催し物の時か学園外の方に向けた日曜礼拝くらいのです。ですからこちらの修道女先生方も教会で神の教えを広めるより、懺悔室で生徒さん達の悩みを聞いたりする役回りの方が多いようです」

だからこそむしろ、有栖学園としては聖パトリック女学園が良いモデルになるのだと、四方は言う。教会を建てるとはいえ本格的な布教活動をするわけではない有栖学園としては、むしろカウンセリングを行える施設を兼用できることに注目しているとのこと。それも今回の潜入口実に一役買っているわけだが、有栖学園としても「良い機会」であったのに間違いはないらしい。

「なるほどね……じゃあシスター四方もカウンセラーを？」

自分の研修はむしろそちらがメインなのだ、彼女は苦笑いを浮かべながら頷いた。彼女は既にカウンセラーの資格試験には合格しており、その際に講習はもちろん他所で研修も経験してきたとのこと。彼女が聖パトリック女学園へ研修に訪れたのは、最終的な詰め^{詰め}の為といったところらしい。

「大上神父は経営面での視察という名目でしたっけ？」

「表向きはね。本当は帳簿なんか見ただけで眼を回しそうだけど」

さすがにカウンセラーのまねごとよりは事務職の方がごまかしやすいだろう。気を配って手配した^{フェアリードクター}妖精学者達に大上は感謝していた。なにより経営方面の視察という名目は、立場をごまかしやすいという利点以外にも一つ利点がある。それは……。

「大上神父。そろそろよろしいですか？」

唐突に職員室の扉が開き、大柄な男が顔を覗かせ声をかけてきた。大上は四方との座談を中断し、現れた男に向け口を開く。

「ああ学園長、わざわざすみません。こちらはいつでもかまいませんが」

そう言いながら大上は席を立ち、学園長の待つ出入り口へ徒歩を進ませた。

「ではシスター四方、行つて参ります」

「はい、がんばってくださいね」

聖女の笑顔に見送られ、大上の「調査」が始まった。

「創立からは約三十年になりますか……」

大上は学園長と共に学園内を巡回していた。彼は一度研修の日程が決まったときに挨拶に訪れたのみで、学園内をよく知らない。そこで学園長自ら、大上を案内する役を買って出ている。この役目は本来、イベントや日曜礼拝などで既に何度も学園に訪れている^{よも}四方が担うべきなのだが、学園をより良く知ってもらう為にとの配慮で現状に至っている。

「あそこに見える大樹は、学園創立時に植樹したものです……あそこまで立派に成長しました。今では生徒達に「伝説の樹」などと呼ばれております……」

学園の歴史を語りながら、学園長は若い神父……の姿をした侵入者に、各教室や設備を案内して回る。大上は歴史に頷き説明に耳を傾けメモを取りながら、学園長の後について行く。自分で調べるよりも的確な情報を得られるのだから、侵入者としてこれほど楽でありがたい申し出はない。しかし反面、騙しているようで……いや、実際に騙しているわけだが……申し訳ない思いも中心にこびりついている。

「学園長は創立当時から今の役職に？」

申し訳ない気持ちをごまかすためのなのか、大上は説明の合間を縫うように、軽い座談を挟む。質問自体に深い意味は特に無いが、何気なく出た言葉がこの質問。

「いえ、私が学園長に就任したのは……もう七年は過ぎましたか。私の友人だった前任者が突然の事故により天へと召されましてね。私は当時学園の部外者でしたが、彼の遺言により学園へ招かれ学園長を務めさせてもらっております」

柔和な笑顔が印象的な、年は五十半ばと見受けられる学園長。彼が着ている司祭服がゆつたりとした物であることもあり、ふくよかな印象も同時に大上は受けていた。そのトー

タルイメージが大上に、学園長は学園創立時から重鎮だろうかという勝手なイメージを抱かせてしまったが、よく考えればそれ相応の歳だと勝手に思いこみ少し失礼な質問をしてしまったと後悔し始めていた。といって下手に謝ったり無理に話題を変えては更に失礼かと、大上はそのまま会話を続けることにした。

「七年ですか……色々ご苦労も多かったのでしょうかね」

「当たり前障りのない返答だが……しかしもう少し言葉を選べなかったのかと、大上はまた口にしてから後悔を始めた。

潜入調査自体は良い滑り出した。しかしあまり役職的な立場になることの少ない大上にとつて、今も、これから、苦労は続くだろう。なぜなら彼は、尊敬語や謙遜語などを含めた形式的挨拶や会話が苦手。今まさに大上は、この「目上の人との会話」に苦労していない。真つ最中。自称ハードボイルドはそもそも型破りな者なのだから、形式的になる必要はない。そう、これはハードボイルドが故に無口だから苦手としているんだと自分に言い訳をすることを大上は忘れない。ハードボイルドだからとかと言うよりは、自分を正当化するために。後悔を前向きに捉えるために。

「何をして「苦労」と捉えるのか。それは人それぞれであり、定義的な物差しがあるわけではありませんか、大上神父」

大上が心中で汗を流しているのを見越しているか定かではないが、学園長は諭すように、若い神父に宗教的説教を始めた。

「例えばそうですね……この生徒達について言えば……」

足を止め、学園長は廊下から窓越しに校庭へと視線を移す。大上もそれにならない視線を外へ向けた。目に映るのは、ジャージ姿で体育の授業に汗を流す女生徒達。今日の授業内容は高飛びのようで、設置されたポールを背面から飛び越え校庭に敷かれたマットへと着陸する様子が小さいながらもよく見えた。

「神の教えを広める身としては、本来ならもつと神学に力を入れ神の御心に触れられる機会を増やすべきだと、よく兄弟達からは指摘されます。しかし我が学園へ入学する生徒や入学させる親御さんは、そんなことは少しも望んでいないのが現状です。この板挟みを、苦労と言えば苦労だと人からは映るでしょう」

視線を女生徒達に向けたまま、しかし言葉は大上に向け説教は続く。

「ですがね、大上神父。本来神の教えとは強制して行う物ではありません。むしろこの学園は他の環境よりも神の御心に触れられる機会が多いのですから、自ら進んで神の道を歩もうとする生徒も現れるでしょう。少しでも多くの生徒が「真実の教え」に気づいてくれるのなら、こんな幸福なことはありません。故に苦労などと考えもしないのですよ」

視線を大上に移し、微笑む学園長。なるほど、貫禄はなにも見た目の印象だけではないようだ。大上は感心しながら、そうですねと相づちを打った。

「苦労といえば……私よりも大上神父、あなたの方が大変なのでは？」再び視線を女生徒達に向けながら、学園長は僅かに笑いながら続ける。「女生徒達に囲まれる生活は、男であるあなたには色々と苦労が絶えないと思いますよ？」

全くその通り。いやむしろ、そう言われると余計意識してしまい、自制するのが大変になってくる。先ほどまで何気なく見ていたジャージの女生徒達ですら、その一言で刺激的な光景に見えてしまうくらいなのだから。まだ今が冬で良かった。薄手の体操着なら彼の

妄想はもつとヒートアップしていたかもしれない。

「あつ、いや、これもまあ……神の与えられた試練なのでしょう」

僅かに頬を赤くしながら、大上は神ハドボイルド精神の教えを何度も心につぶやき始める。

「では、その試練を乗り越えるためにも次へ参りましょうか」

柔らかな笑みを携えたまま、学園長は若い……あらゆる意味で若い神父を先導していく。

「では大上神父、私はこれで」

学園内を軽く一回りしてきた二人は足を止め、学園長は軽い会釈と共に大上へ声をかける。

「わざわざありがとうございます。ではまた昼食時に」

そして大上は彼よりも深く頭を下げ、しばし遠ざかっていく学園長をそのまま廊下で見送る。そして顔を上げた大上は軽く息を吐き出し、すぐ脇にあったドアノブに手をかけた。

そのドアには資料室と書かれたプレートが貼られている。

ガチャリと音を立て開かれるドア。中は少々かび臭く埃っぽく、良くも悪くも資料室らしい雰囲気。大上はキョロキョロと辺りを見回し、室内にあると聞いている物を探し始めた。

大上が聞いたのは聖パトリック女学園の歴史と経理資料のある場所。たしかに大上はそれを調べるために資料室の使用許可をもらってはいるし、その資料も必要な物だ。しかし今大上が探しているのはそのような紙の束ではない。

「お、あつた」

大上が目をとめる先にある物。それは一台のパソコンだった。

雰囲氣的に古めかしい室内にあつて、そのパソコンは少々場違いではないかと思わせるほど、綺麗な最新式のパソコン。側にはスキャナとプリンターの業務用複合機も設置されている。パソコンに繋がっている配線は一つにまとめられ、床の中へきちんと収納されていた。

大上はパソコンの電源を入れ、立ち上がるのを待った。真っ黒な画面にぼんやりと白い文字が浮かび上がり、消え、そして今度は奇妙な旗のマークが映し出される。

「さすがお嬢様学校。ちゃんと最新式のOSにもう対応させているのか」

画面を見つめながら大上が感心をつぶやいたその時、突然画面が不自然にゆがみ始めていく。ディスプレイの調子が悪いのか？ しかしそれを見ている大上は全く慌てる様子がない。

じつと大上が見つめる先で、画面は更に奇妙な物を映し出し始めた。髪の毛？ 違うやら人の頭らしき物が映っている。顔すら全て覆い隠している髪が、どんどんアップになっていく。まるで画面の中から外へと飛び出しそうな……いや、もう飛び出している。画面がまるで水面のように波打ち、だらりと長い髪がキーボードの上へとたれ落ちる。画面の縁を内側から指でつかみ、今すぐにでもずりりと頭が、身体が、出てきそうな勢い。そして謎の何者かが、つぶやく……。

「ちよつ……出られない」

大上は後頭部を掻きながら、溜息をついた。

「アホか……なにやってんだよ」

罵倒されながらも、間拔けなその何者かはうなりながら、それでも何とか画面から出ようとしている。長い髪が揺れ、キーボードの上に積もっていた埃を綺麗に払っていく。

「いやほら、昔あつたじゃない。こんなホラー映画(^_^)」

どうにか画面から出ている頭だけを精一杯あげて、ホラー少女は笑っている。

「ていうかね、ちっちゃいのよ。15インチの画面じゃさあ。もっと大きな画面用意してくれないとお(---#)」

「誰がパソコンのディスプレイから人が出てくる事を想定するんだよ」

理不尽な文句と、まるで語尾に顔文字でも付けているのではないかと思えるようなオーバリアクションに大上があきれながら答える。

「だいたいさ、お前見たこと無いだろ。そのホラー映画」

ずいぶんと古い映画だ。話に聞いたことがあったとしても、実際に見ていたかどうかは彼女の歳を考えると非常に怪しい。ちょうど学園の生徒達と同じ中高生くらいに見えるその少女の、実際の歳を知っている大上なら尚更そう思える。

「いいから普通にでてこいよ」

このままでは埒があかないことを少女も察してか、大上の要望通り普通に……彼女にとって普段通りの方法で画面から外へ出ようとしている。

画面の大きさに合わせ、瞬時に身が細くなる少女。そこからゆるりとウナギのように画面から勢いよく飛び出し、そして瞬く間に宙に浮いたままポンと元の、人間大の大きさへと戻った。

「いやね、動画がアップされててそれ見たのよ最近。だからせっかくだし、ケンちゃんの前でやってみようかなあって(^^)」

飛び出した少女は制服、質素ながら高級感溢れるここ聖パトリック女学園の制服を着ていた。彼女は机の端に腰を下ろし長い髪を半分ほど手で右側に束ね、赤い飾りの付いたゴムの髪留めでくくりながら先ほどまでの奇行について言い訳を始めている。

「わざわざ髪ほどこいて待ってたのにさあ……」

右側をまとめ終え、今度は左側の髪をまとめ始めている。その様子を、大上は腕を組みながら眺めていた。

「なんだ、とうとう悪霊にでもなったのかと思っただがな」

「あ、そーいうこと言うかなあ」

皮肉混じりに非難の言葉を投げかけられ、少女は頬をふくらませ抗議する。

「私は幽霊みたいなものっていうか、電脳霊だけださ、れっきとした文車妖妃(ひんぐろまよつひ)って妖怪なの。ま、私は手紙からじゃなくてメールから生まれてるけどね(^^)」

第三者、それも普通の人間から見ても、悪霊と妖怪にどれほどの違いがあるのか判らないうが、少なくとも彼ら人外存在にとって、これは大きな違いである。妖怪は、例えば人間に善も悪も混在するのと同じように、彼らの中でも混在している。しかし悪霊は悪の霊、つまり悪人と指さされるのと同じように侮辱的な言葉になる。

「女子高生の無駄なメールから生まれた一歳児か……」

「あー、無駄とか言うなあ」

他愛もないメール交換は、確かに外から見て無駄なやりとりにも見て取れる。しかし当

人達にしてみれば大切な交流であり、すぐに消去されるとしてもそこにはちゃんと意味があった。だからこそ彼女が生まれたのだと、そういえば妖精学者フェアリドクターも言っていたなあ……などと、大上はぼんやり思い出していた。

「だいたいさあ、人をわざわざこんなところにまで送りつけといて、そーいうこと言うかなあ(--#)」
「よく言うな。「スパイってちょっとかっこいいよねえ」とか「パト女の制服着られるの楽しい」ってノリノリだったの誰だよ」

生まれてからまだ一年と数ヶ月しか経過していないが、既に容姿同様の、中高生並みの知性を持つている彼女は、今回の潜入調査にはうってつけの人材だった。先ほど登場したように、彼女はパソコン……ネットの中を住処としており、通信が繋がっていればそこを出入り口はどこへでも潜入できる。そしてネットから生まれた彼女は当然のようにネットを巧みに使いこなし情報を収集するのに長けている。

ただ難点は、彼女の誕生日が女子高生のメールからということもあって、彼女もまた今時の女子高生そのままに、多少軽い性格だということだろうか。

「それより、ちゃんと調べといてくれ……」
「それよりってなによあ。もうちょっとさあ、この角川藤美ふじみ様に感謝の気持ちとか、そーいうのはないわけ？」

ムスツとした表情を大上に向け、いらだちを隠さずに態度で示す。大上は眉間にしわを寄せ、また後頭部を手で掻いている。

「あー悪かった。角川藤美様のおかげで大変助かっております。感謝してますから、頼んだりストを見せてくださいお願いします」

「なによそれえ、その投げやりな態度はあ」
棒読みな謝罪に満足するはずもないが、そもそも大げさな態度ほど腹を立ててもいなかった角川は、大上に頼まれていたリストを見せるために自分が出てきたパソコンへと近づいた。

「ていうかさあ、ハードボイルド気取るんなら、もうちょっとさ、それらしい態度って無いの？ 仮にも女の子相手にする態度じゃないよねー」

それは全くその通り。思わぬ反撃に、大上は寄せていたしわを更に深くしてしまう。角川はその様子を見られたのが嬉しかったのか、口元を緩ませ満足げだ。

角川はパソコンの前面にあるUSB差し込み口に指を当てる。すると画面上にあるマウスカーソルが動き出した。彼女は直接自分の指を接続コード代わりにし、入力端末を使わず自分の考え通りにパソコンを動かしていた。

「聖パトリック女学園セントパトリックって校内のネット環境が充実してるのよ。ちゃんとサーバも用意してあって、学園内の端末ならどこからでもデータが閲覧できるようになってるし。もちろんそれなりのセキュリティも万全だけど……ま、私には関係ないわね」

今は外から操作しているが、その気になれば中に潜り込み隅から隅まで閲覧することも可能。そんな彼女に、パソコン上のセキュリティなど確かに意味をなさないだろう。

「これね、生徒名簿。ちゃんと顔写真もあるから、在学生をみんなチェックできるよ」
大上がまず真っ先に確認したかったこと。それはあの夜に刃を交えた少女の確認。ハッキリと脳内に刻みつけた顔の記憶とディスプレイに映し出されている一人一人の顔写真と

を比較しながら、大上はグノーシスの修道女を探し始めた。

この作業は時間が掛かる。なにせ一人一人確認していく必要があるから。だからこそ、大上はそう滅多に人の来ない資料室という場所と、やはり滅多に人の来ない午前の授業中という時間を選んでいった。角川と密会するという意味においても、この場所と時間はとても重要だった。

「潜入調査するならさあ、私も転校生とかで潜入したかったなあ。そしたら、もっとメル友増やせたのになあ。」

大上が調べている間暇な角川は、近くの机に腰掛け足をぶらぶらさせながら軽い不満を漏らし始めた。

「面倒なんだよ、手続きが。それに俺やチャコさんの研修組と同時期に転校してきたら怪しまれるだろ？　どこの誰が敵なのか判らないんだから、少しでもリスクは小さくしたいんだよ」

角川は聖パトリック女学園の制服を着ているが、在学生ではない。人目を避けながらの調査が可能な彼女を進入させるのに、無理をして転校手続きをする必要はなかった。それ以前に、そもそも大上を研修員として潜入させること自体かなり無理をしている。突然研修を申し出ている上に女子校に男を入れてくれと頼んでいるのだから。四方や彼女の所属する教会の口添えがなければ難しいことだっただろう。そのような状況で、更に転校生など潜入させるにはあまりにリスクが大きくなる。必要ないなら無理をすることもないのは道理だ。

「でもさー、つまらないんだもーん、」

マウスをカチカチと鳴らしている大上の横で、まだ角川は不満をたれていた。大上達の苦労は、角川当人にとってみればどうでも良いことなのだろう。

「私まだパト女のメル友って20人しかいないんだもん。せつかくだしもっと増やしたかったのになあ。」

メールから生まれた妖怪は、当然メールすることに自身の意義を見いだしている。メル友を増やしメールをやりとりすることが生き甲斐なのだ。そして今も当然のように、大上に話しかけながら携帯片手に画面も見ずメールを打っていた。

「うまくいけば21人目が出来る……っと、その21人目見つけたぞ」

ディスプレイには一人の女生徒名簿が映し出されている。大上の声に反応し、角川はのぞき込むように大上の横へ顔を並べディスプレイを凝視した。

「この娘かあ……なんか「戦う女の子」って感じじゃないね。綺麗な顔して、なんていうのかな、ぶつちやけありえないって感じ？」

なにがどうありえない感じなのか、いまいち大上には言葉で伝わってはいないが、彼女の言いたいことはニュアンスで感じ取った。

正直に言えば、大上も少々自分を疑っていた。最初うつかり見逃してファイルを一度めくり直してしまっただほど、以前出会ったときの彼女と写真の彼女では印象が違いすぎる。

特に、あの時終始激怒の感情を込め大上を睨みつけた瞳と、ほぼ感情の見られない写真の瞳では伝わる雰囲気の違いすぎる。もっとも、実物と写真とで印象が違うのは当然といえは当然なのだが。

しかしじっくり見れば、なるほど確かに彼女に間違いないと、大上は納得し始めた。利

発そうな顔と、そこから感じる冷静な印象。あの時のような熱い瞳で睨みつけてこない分、冷静な印象はより増しているが、あの時の彼女に間違いないだろう。この写真で更に確認できたのは、被り物ウイングルをしていて判らなかつた彼女の髪。その長く美しい髪はバストアップの写真では収まりきっていない。また日本人には珍しいくらい薄い色も特徴的で、黒髪のとやとは違う輝きを放っていた。ここが規律の厳しい聖パトリック女学園お嬢様学校という事を考えると、どうやら染めているわけではないらしい。総合的に見て、なるほど角川の言う「ぶつちやけありえない」という美しさを兼ね備えていると言えた。

「月原恵美……エミりんか。おけ、ちよつとメル友みんなに聞いてみるね。」

早速とばかりに、角川はディスプレイに表示されているプロフィールを見ながらメールを打ち始めた。ネットとメル友という彼女の幅広い交友関係ネットワーフは彼女の強みであり、また今回潜入調査に協力してもらっている理由の一つにも挙げられている。名簿からでは判らない月原恵美の性格や周囲の人々などを割り出すには、大上よりも遙かに彼女の方が適任だ。

そもそも今回の潜入調査をするきっかけとなつた少女との出会い。月原という修道女シスターが食いついた狼男ウェア・ウルフ、出現情報は、妖精学者の天道寺を通して角川の手によつてされた流言だ。彼女がメル友に「噂」という形で流した情報を、おそらく月原はこの学園で耳にしたのだろう。そして半信半疑のまま確かめに出向き、見事狼男ウェア・ウルフを発見したところだろうが、大上達にしてみれば、角川のおかげで見事に月原という修道女シスターが釣れたという結果。このような成果をきちんと上げているだけに、角川の交友関係ネットワーフは侮れない。

「頼むよ。俺は……そうだな、ちゃんと研修らしいことをしておくか」

表向きの名目は研修生なのだ。本来の目的ではないが、偽装するためにもやるべき事はやつておかなければ。大上は月原のプロフィールを数枚プリントアウトし終えたところで席を立ち、学園の歴史や経理関係のファイルを探し始めた。

「ああ、あれだ……もしお前が転校生として来てたら、今頃みっちりレベルの高い授業を受けてなきゃならなかつたんだぞ？」

振り返り角川を見つめながら、にやりと意地悪く微笑む大上。対して角川は携帯から顔を上げてそれは嫌だとオーバーなほど苦い顔を見せていた。

しばらく調査を角川に任せた大上は、資料のとりまとめや学園長らとの昼食、午後は四方と園内の視察に回るなど、表向きの仕事をこなしていた。潜入するための口実に使った視察という役回りに、グノーシスの修道女シスターを探し根元となる異端教団の本拠地を探し出すという本来の目的に費やす時間を奪われている。少女の身辺調査を始めたばかりの現状で大上に出来る事は角川の報告を待つだけなのだが、大上は焦りを感じていた。

そもそも、潜入するまでに三週間という時間を費やしている。それを乗り越えやつと潜入できただけでも良しとすべきなのだが、それでも大上は焦っていた。

異端教団カルトの目的が判らない。大上の焦りはここに集約されている。

大上が少女と出会つたのは偶然だ。撒き餌を準備しばらまいたのは確かに大上と彼の仲間達だが、その撒き餌にどんな相手大物が集まるかまで予測は出来ていない。もしかしたら月原よりも先に、ただ好奇心で群がった人々に姿をさらすことになつたかもしれない。そうなればそれで、より噂が広まるので大物を釣り上げる率が上がるだけではあつたが……な

んにしても、目標となる相手を特定しないやり方だっただけに、釣れた魚に釣った本人が戸惑っているのは事実。

大上は学園在籍の先生シスターと話があるという四方と別れ、一人で職員室のある教会へと戻ろうとしていた。そんな帰路の中で、大上は焦る気持ちを落ち着かせる意味も含め自分なりにあれこれと脳内の整理を始めた。

あの少女がグノーシス主義の異端教団カルトに所属する修道女シスターであることは、彼女の着ていた黒い尼僧服の胸元に白く刺繍されたグノーシス十字が証拠となっている。しかし異端扱いされているとはいえ、グノーシス主義は武装集団ではない。にもかかわらず槍を構え突然襲ってきたのは解げせない。狼男ウエア・ウルフを邪悪な存在と勝手に決めつける事自体は、グノーシス主義であることの直接的な意味はないだろう。その点はおそらくプロテスタントでもカトリックでも同じだから、その点は……自分が狼男ウエア・ウルフなだけに切ない事実だが……考慮に入れる必要はなさそうだ。問題点は「武闘派の異端教団カルトがこのあたりに存在しており、この学園と何らかの繋がりがあると思われる」という点だ。

もう一つの問題は、武闘派修道女シスター月原恵美。彼女はカウンター・ハンターとして倒すべき相手なのか救うべき相手なのか、その問題。

彼女は大上のことを両親の敵かたきだと叫んでいた。むしろ大上に心当たりは全くないが、彼女にしてみれば狼男ウエア・ウルフなら全てが敵かたきなのだろう。大上は彼女と出会ってからこれまでの間に、狼男ウエア・ウルフによる殺人事件について調べていた。大上にとって残念なことに、一般的な人間がイメージするままの、邪悪な狼男ウエア・ウルフも少なからず存在している。当然そんな連中が引き起こした殺人事件もいくつもあり、それらの表に出ない事件を三週間の間調べ続けたが……少女が関わっていそうな事件は見あたらなかった。

少女の証言通り、実際に彼女の両親が狼男ウエア・ウルフによつて殺害されたのならば、今回の件とは別にその狼男ウエア・ウルフを探しだし処置くわいをしなければならぬだろう。不当な狩りを続ける狩人ハンターがいるなら、その標的が人間であれ魔物であれ、事の解決に乗り出し悪しき狩人ハンターを罰するのがカウンターハンターなのだから。

もし少女の証言が偽りなら……なぜそのような事を少女があの時口にしたのかを解決しなければならぬ。あの時の雰囲気から、彼女が嘘をついているとは思えないが……だとしたら、なぜそのような事を思いこんでいるのかが問題だ。両親が死んだ事実を心が否定するあまりに幻影を見たのか、それとも誰かに嘘を吹き込まれているのか……どのような理由があるにせよ、それが彼女を異端教団カルトの狩人ハンターにした原因となっているなら、彼女のためにも原因を取り除く必要がある。

いずれにしても、月原という少女に接触する必要がある。大上の思考がそこへ行き着いた時、彼はまた大いに悩んだ。

さて、どう接触すれば良いのだろうか？

ハードボイルドを気取る男は、彼の理想とは正反対に、女性の扱いに不慣れである。仮に慣れていたとしても、女生徒に異性の研修員が声をかけること自体色々問題があるだろう。今日の昼食という懇談の席でも、学園長や他の先生達から女子校における異性の立場をあれこれと聞かされていたところだ。その点からも不用意に近づくべきではないのだが、しかし全てを角川に任せるわけにはいかないだろう。どうにか人間の姿かたで接触は図りたいが、さてどうするべきか……。

「……あれ？」

悩むハードボイルド気取りが教会の扉を開けると、そこには正面の大きな十字架に祈りを捧げている一人の生徒がいた。そのこと自体はここが学園の教会であることを考えれば不思議でもなんでもないが、思考の海を漂っていた大上には少女の目撃が不意打ちに近く、思わず妙な声を上げてしまった。

大上の声と扉が開く音に生徒が気づき、少女は立ち上がり振り向いた。そしてまた大上は声を上げそうになったが、さすがに今度はその声をすんでの所で飲み込むことが出来た。

月原恵美だ。祈りを捧げていた女生徒は、先ほどまで大上がどう接触すべきかと悩んでいたその当人。振り向きざまになびいた髪が夕日を受け金色に輝き、清楚な顔立ちを更に引き立てるこの一瞬、大上には月原が聖母にさえ見え彼の鼓動を一気に逸らせた。その幻は教会という雰囲気だからこそ見えたのか、それとも彼女の美しさからか……などと考える余裕は、当然大上にあるわけがない。

「あつ……ああ、すまない。邪魔をしたようだね」

動揺していることを悟られないように、出来る限り落ち着いた雰囲気を出そうと大上は勤めた。それがかえって普段より芝居がかった調子になってしまったが、初対面……少なくとも人間の姿では初対面である月原に、大上の様子がおかしいことなど判るわけもない。

「いえ……」

たった一言、しかし一言だからこそ、凜とした鈴の音を思わせる声。当然のように大上は更に動揺した。

さて、どうするべきか。図らずも接触してしまった月原タイゲットに、この後どう切り出し動くべきなんだ？ 大上は焦った。月原はこれと違って大上に興味があるわけでもないのか、会釈をすませこの場を立ち去ろうとしている。このまま今日のところは見送るべきなのか？ 確かにその方が無難ではあるが、しかし動揺している大上は相手に変な印象を与えてしまっていないかと変に焦り、どうにかその印象を取り返せないかと考え始めてしまっている。下手に動けばかえって怪しまれ、今後に支障を来す可能性もあるが、そこまで大上の思考は回っていない。月原は少し屈み、足下に置いてあった物を手にとって退場しようとしている。焦る大上。どうする？ どうする？

「……バケツ？」

思わず大上はまた妙なことを口走った。しかし突拍子もない言葉というわけでもない。月原が手にした物……汚れた水の入った銀色の清掃用バケツが大上の目に止まり、何故彼女がそんな物を持ってきていたのか疑問に感じた。それが瞬時に言葉へ出てしまったに過ぎない。

「雑巾がけをしておりましたので……」

見れば確かに、彼女はバケツと共に雑巾も手にしている。どうやら彼女は教会の清掃を一人で行った後に祈りを捧げていたところだった様子。

「ああ、そうですか……ご苦労様です。お一人で清掃を？」

思わず口にした言葉だったが、それが大上を救った。一言をきっかけに会話が成り立ち、大上の心を落ち着かせていった。更に最初の接触ファーストコンタクトで下手な印象を与えずにすませることも出来、会話をすることでむしろ好印象を与える機会チャンスにも恵まれたのだ。教会でのことだけに、神へ感謝したいところだ。ウエアウルフ狼男を受け入れてくれるのなら。

「はい……勝手にやらせていただいていることなので、お気になさらずに」

ミッシヨン系の学園とはいえ、信心深い生徒は皆無だと聞いていた。そんな中自ら教会の清掃をするとは……彼女の信仰心は確かな物のようだ。それがグノーシス主義へ傾いた物だとしても。

「そうですか、しかし大変素晴らしい心がけですね……ああ、私は大上賢。本日より研修のために学園へお邪魔させてもらっています。よろしく」

「朝礼で伺っております」

軽く会釈をして自己紹介をすませる大上に対し、月原は簡素に言葉を返した。どうやら月原は大上が思っている以上に、良くも悪くも彼に対し関心がないようだ。これは最悪のケースを逃れられたと捉えるべきか、それとも厳しい状況からのスタートとなったと捉えるべきか、その判断は難しい。

「普段からこのような事を？」

どちらにせよ、大上は出来る限り彼女のことを色々と探り出そうと会話を続けた。当人にとっては迷惑かもしれないが、大上にとってチャンス逃す手はないのも道理。

「はい……」

しかし大上の思惑を外れ、会話が弾まない。どうやらあの時の、槍を手にしたときの彼女と違い積極的に絡んではくれないようだ。おそらく印象同様に本来の性格も冷静クールなのだろうと大上は推測した。

そうと判ったところで、さてどう攻めるか……大上は悩み、そして次の言葉を口にする。

「そうですか。ええっと……」

口にしたのは良いが、早速言葉に詰まる大上。彼女をどう呼べばいいのかに悩んだために。

大上は既に彼女の名前を知っている。しかし知っているのは月原にとって不自然なことだ。故に彼女の名前を口には出来ないが……だからといって「あなた」では印象が悪くなりそうだし、「お嬢さん」では気取りすぎている。こんな場合、どう呼べば不自然でなくなるのか……ハードボイルド的に考えても答えが出てこない。

「……月原。月原恵美と申します」

大上が困っているのを察したのだろう。彼女自ら名乗り出てくれた。

「ああ、申し訳ない月原さん……月原さんはこの教会に毎日清掃のために通っているのですか？」

救いの手が差し伸べられ会話を続けられた大上は、一つの思惑くもの元で会話を進めようと試みた。

「清掃と……懺悔ざんげの為に」

懺悔？ 礼拝ではなく？ 多少引つかかる言葉だったが、今そこを突き詰めると妙なことになるだろう。大上はそう判断し、今の疑問は頭から振り払い自分の計画を進める方に専念した。

「そうですか。それでは……大変不躰ぶしつけなお願いですが、月原さん。私に教会のことを色々教えてくださいませんか？」

大上の妙な申し出に、月原は表情を変えないまま。冷静クールな性格がそうさせるのか、それともあまりに突拍子もない申し出に戸惑っているのか大上には判断が出来ない。しかしそれでも彼は話を進めてみる。

「朝礼でお聞きになったと思いますが、私は研修の為にこちらへお邪魔しています。しかしこんな格好をしていても、実は経理の方が専門で教会などのことには疎いんです」大上は自分の着ている神父服を軽くつまみながら、話を続けた。「よろしければ、信仰に熱心な月原さんから、こちらの教会に関して色々とお話聞きたいだけだと助かるのですが……特に私の場合、生徒側からの見解というものが非常に重要なので……」

おかしな申し出だ。客観的に見て大上の申し出はおかしなところが多すぎる。確かに経理専門で信仰に興味のない関係者というのがいてもおかしくはないが、それを生徒の前で口にして良い物とは思えない。しかも生徒に個人的な助言を願うなど、立場を考えればあってはならない。異性なのだから尚更だ。

「あの……」月原が戸惑うのは無理もない。そんな状況だが、しかし月原の口からは意外な言葉が紡ぎ出される。「明日でよろしいですか？ 今日はまだ遅いので……」

「ええもちろん。お伺いしたいことも多いので、明日の放課後にでも神学科の職員室にお越しください」

思惑通りに事が運び、大上は満面の笑みを月原に向けた。

大上はこの時判ってはいなかった。本来なら断られて当然の申し出、惨敗率の高い賭に勝ったという幸運を。

「では失礼します」

再び軽く頭を下げた月原は、バケツを手に教会を出ていった。それを見送った大上は深く息を吐き出しこの場を乗り切った喜びに、静かに打ち震えていた。

そして冷静になったところで……いかに自分が愚かなことを口走っていたか、その事に気づき、大量の冷や汗を流し静かに打ち震えていた。